

カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ

—利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性に着目して—

(平成 27 年 8 月 31 日受付, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

A study on Neighbourhood Houses in Canada Ⅰ

—Focuses on the interchangeability of users and volunteers—

奈良学園大学人間教育学部

岡野 聡子

OKANO Satoko

Nara-Gakuen university

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：カナダネイバーフッドハウス, 地域コミュニティ, ボランティア, 利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性

Abstract : This article aims to consider how happens the interchangeability of users and volunteers in the Neighbourhood House of Canada. Neighborhood House is originated of the settlement movement. They are a volunteer-driven, community-service agency, their mission is to make neighbourhood a better place to live, focuses on to enable people to enhance their lives and strengthen their community. There are 14 Neighborhood Houses in Vancouver (2015.7) and it is practiced for satisfying the community needs.

A semi-structured interview was conducted and obtained data was analyzed by qualitative. As a result, a case of shifted from user to volunteer stuff is ① When they started Volunteer, they didn't have a clear motive for volunteer, ② As a help of part of daily life, and a case of shifted from volunteer stuff to user is ① Satisfying self-needs, ② liberation from role.

Keywords : Canada Neighbourhood House, Local community, Volunteers, Interchangeability of users and volunteers

1 はじめに

筆者は、カナダ・バンクーバー市におけるネイバーフッドハウスを知ってから今年で9年目となり、研究調査にあたっては7年目となる。2015年現在、カナダBC州バンクーバー市には、14のネイバーフッドハウスⁱがあり、地域コミュニティのニーズを満たすための活動が実施されている。ネイバーフッドハウスとは、イギリスのセトルメント運動を源流とし、セトルメントハウスやコミュニティハウスとも呼ばれている地縁型コミュニティのことであり、移民支援組織としての伝統を持つ。ここでは、人々の日常生活を包括的

に支援するためのサービスやプログラムが展開され、その数は約30種類にのぼる。また、サービスやプログラムは、地元の大学生や地域住民、新旧移民者、留学生などがボランティアスタッフとなって提供し、活動を共にしている。

通常、ボランティア団体やNPO団体がサービスやプログラムを提供する場合、テーマ設定(たとえば、地域の子育て広場、病後児保育、高齢者の集い、労働問題を取り扱うもの、ホームレス支援、等)をしている場合が多く、個別のニーズに応じるために対象者は限定される。また、そこでボランティア活動をする者は、対象者としての立場にならない場合も多いだろ

う。しかし、ネイバーフッドハウスでは、多様なテーマ設定に基づいた支援が一つの施設に存在しているため、施設の利用者がボランティアスタッフとして活動をしている様子もごく自然に見られる。逆に、ボランティアスタッフとして活動をしていた者が、利用者としてサービス・プログラムを利用する姿も見られる。

本稿では、こうした「利用者からボランティアスタッフへ」または「ボランティアスタッフから利用者へ」という立場の変化がどのような外的・内的要因を伴って起こるのか、参与観察、聞き取り調査から考察することを目的としている。

2 先行研究

カナダBC州バンクーバー市におけるネイバーフッドハウス研究の第一人者は、ブリティッシュコロンビア大学のMiu Chu Yan教授であるといえるⁱⁱ。彼は、トロント市のネイバーフッドハウスに勤務した経験を有し、その後、香港、ロンドン、トロント、サンフランシスコの大学において、ソーシャルワーク教育やコミュニティ開発の研究・教育に携わってきた。現在、カナダのコミュニティ組織の歴史の変遷やバンクーバー市における全てのネイバーフッドハウス（14施設）を対象とした体系的な調査にも取り組んでいるⁱⁱⁱ。彼のバンクーバー市におけるネイバーフッドハウス研究の代表的な文献には、“*Bridging the fragmented community: Revitalizing settlement houses in the global era.*” (Yan, 2004)、“*Bridging newcomers in the neighbourhood scale : a study on settlement / integration roles and functions of Neighbourhood House in Vancouver. Final Report*” (Yan, 2006)、“*Social capital and ethno-cultural diverse immigrants: a canadian study on settlement house and social integration.*” (Yan, M.C. & Lauer, S. 2008)、また、“*Buiding Welcoming and Inclusive Neighbourhoods Pilot Project*” (Yan, 2009-2010)の実践があり、カナダにおけるネイバーフッドハウスの歴史の変遷、ネイバーフッドハウスの特徴^{iv}、ネイバーフッドハウスの移民の社会統合に果たす役割についてまとめられている。筆者は、2015年8月19日(水)にYan教授のもとを訪問した際、対象者を限定せず、多様なニーズに応じているネイバーフッドハウスの様相は大変複雑なものであり、その実態をとらえきれないと述べると、同意し、以下のように回答された。

“Well, that’s the nature of neighbourhood house. Neighbourhood house basically they are looking at

holistic, so they are trying to serve different age to them. Neighbourhood house is not for youth. It’s not for elder. It’s not for children, therefore everybody, but one thing we need to also be careful is neighbourhood is very responsive to community need and because of that each community have different need, alright, so that’s why each neighbourhood house will have slightly different programming. Let’s say if you are in an area that with more elder age people then you can imagine the neighbourhood houses would have more senior programs. South Vancouver neighbourhood house is a good example, because they are very close to a more aging community, so that’s why they have more senior programs and I don’t think they have one childcare centre, but they have two senior service, so then you can imagine, because this is the population they serve. Like in Gordon, I don’t think Gordon have many children program. They have a family place, but senior program tend to be their focus, because there is a very aging community. They don’t have too many children’s but if you say that you go to Ceder Cottage or even for FrogHollow, you see more children’s program, because it is a residential area with many small families. Small families tend to have more children’s so that’s why they provide more children’s program-adult program, so this is the beauty of neighbourhood house.”

ネイバーフッドハウスは、すべての人々のためであるが、ネイバーフッドハウスにおいて重要なことは地域コミュニティのニーズ（特性）に即しているかどうかである（下線部）。そのため、ネイバーフッドハウスでは、多様なサービスやプログラムが展開されているが、各施設によってサービス・プログラム数という「量」および展開される内容である「質」も変わってくる。Yan教授もネイバーフッドハウスの特徴は列挙できても、定義するとなると難しいと述べていた。

また、ネイバーフッドハウスに関する他の文献には、“*How Strangers Become Neighbours : Construction Citizenship Through Neighbourhood Community Development*” (Cavers et al, 2007) や “*Cosmopolis II : Mongrel Cities in the 21st Century*” (Sandercock, 2003) などがある。こうした文献には、日常生活を包括的に支援する社会サービスの提供のあり方、コミュニティを基盤として展開する多様な活動を統合させ、社会関係資本構築の場としての役割を担っていることが言及されている。

先行研究を概観すると、ネイバーフッドハウスの社

会的意義について述べられているが、ネイバーフッドハウスに集う人々の様相や参画者として活動に取り組む動機や過程について具体的に述べられたものは管見するあたり見当たらない。

3 研究目的および調査対象地の概要について

(1) 研究目的

本研究では、2010年3月1日(月)～3月15日(月)および2010年8月13日(金)～9月11日(土)のゴードンネイバーフッドハウス(以下GNH)における参与観察および聞き取り調査をもとに、利用者と提供者の役割転換がどのような外的要因・内的要因を伴って起こるのか考察することを目的としている。

(2) 調査対象の概要

①ゴードンネイバーフッドハウスについて

ゴードンネイバーフッドハウスは、バンクーバー市ウエストエンド地区(1019 Broughton Street Vancouver BC V6G 2A7)に位置し、1942年にバンクーバー市ネイバーフッドハウス協会(ANHGV)によって正式に開設された。本施設の開所時間は、月曜日から水曜日の9時～21時まで、木曜日から土曜日は9時～16時30分である。休館日は日曜日とパンフレットに書かれているが、休館日も17時～19時までの間、アルコール依存症やドラッグの問題を抱えた自助グループや、BC州精神保健および依存症サービス(BC Mental Health & Addiction Services (BCMHAS))のスタッフがうつ病や軽度精神疾患、薬物依存の問題を抱えた人々のために茶話会を開いている。

本施設が位置するウエストエンド地区は、204ha(東京ディズニーランド4つ分)の規模である。2011年度の国勢調査によると、人口は44,543人であり、1971年と比較すると19%上昇している。居住者の年齢構成は、19歳以下が6%、20～39歳が48%、40～64歳が34%、65歳以上が13%であり、平均年齢は37.4歳である。世帯構成では、総世帯数28,955世帯のうち、単独世帯が59.1%を占める。また、世帯収入の中央値はCA\$38,581(バンクーバー市はCA\$47,299)である。低所得世帯(CA\$25,000以下)は、32.8%(バンクーバー市は26.6%)となっている。2006年度の国勢調査時からの人口流動率は66.4%となっており、バンクーバー市の50.2%と比較すると高いといえる。この地区は、ビジネス街、商業施設も数多く立ち並び、居住者の賃貸住宅率が81%であることを考えると人口流動率の

高さは不思議なことではない。また、母国語は英語が61.3%、フランス語が3.4%、中国語が5.2%、日本語が4.2%、韓国語が3.8%、スペイン語が2.9%、その他の言語が19.2%となっている^v。

②ミSSIONステイトメントおよびダイバシティステイトメントについて

ゴードンネイバーフッドハウスでは、以下の5つのミSSIONステイトメントと、7つのダイバシティステイトメントを掲げている。

【ミSSIONステイトメント】

- ・コミュニティサービスの提供をボランティア主導で行う。
- ・私たちの任務は、私たちの地域をより住みやすい場所にあることである。
- ・私たちの目標は、人々が自分たちの生活を喜んで受け入れることを可能にし、そして自分たちの地域コミュニティを強化することである。
- ・私たち(隣人)が自発的な行動だけで取り組むことができない問題を抱えた時、GNHはその問題に対する必要な資源を確保するための手助けやサポートを提供することである。
- ・私たちの課題は、さまざまな人々の変化するニーズに合った新しいプログラムやサービスを開発し、多様なコミュニティと共に活動することである。

【ダイバシティステイトメント】

- ・私たちは、全ての人種や宗教、文化、能力、経済レベルにいる子どもや若者、大人、高齢者を受け入れる。
- ・私たちは、多言語を話す。
- ・私たちは、全ての性的志向の男性や女性を受け入れる。
- ・私たちは、多様性を尊重する。
- ・私たちは、私たちの会員や理事会、ボランティアスタッフにおいて地域に住む人々の多様性を反映するように努力する。
- ・私たちは、全ての近隣住民を尊重する。
- ・私たちは、私たちの家に来る全ての人(サービスを与えるか、もしくは受け取る全ての人)が、同じ敬意をここで出会う全ての人々に示すことに期待する。

(下線部もそのまま引用)

ダイバシティステイトメントの最後は「それゆえに、私たちは私たちの協会やコミュニティにおける全ての包括的な取り組みを促進させ、活動し続ける。」という言葉で締めくくられている。ダイバシティステイトメントは、GNHやANHGVに限ったものではなく、バンクーバー市におけるコミュニティセンターや他の非営利団体にも見られるが、多文化主義の歴史を取り上げてダイバシティとは何かを述べるものや、先住民民族への敬意を表すものとして書かれているなど様々であった^{vi}。そのため、GNHのように「ALL（全ての）」という言葉は何度も利用し、誰にとっても分かりやすく親しみやすい言葉を選んで表現されていることが特徴であるといえる。

③ ゴードンネイバーフッドハウスにて展開されるサービスおよびプログラム

GNHでは3ヶ月に一度、パンフレットを発行している。2010年9月発行のパンフレットによるとGNHの事業は、①一般的なプログラム（General Programs）、②乳幼児プログラム（Infant & Toddler Programs）、③子どもと青少年プログラム（Children & Youth Programs）、④語学クラス（Language Classes）、⑤雇用サービス（Employment Services）、⑥協働プログラム（Co-Sponsored Programs）、⑦シニアプログラム（Older Adult Programs）と7つのカテゴリーに分けられている。なお、これらのサービスやプログラムは、運営会議による議決と予算の関係によって毎年見直しが行われている。

高齢者のプログラムは、1つとしているが、この中には、ランチ提供サービス、太極拳、PCトレーニング、外出プログラム、シニアイベントの5つが含まれている。また、特定のニーズを持つ者には、ロシア語

表1 ゴードンネイバーフッドハウスにて実施されているサービス・プログラムの対象者および総数の内訳（2010年度）

	対象者	サービス・プログラム数
1	乳幼児(1.5～6歳)	2
2	学齢期の児童・生徒(5～18歳)	6
3	家族(子どもがいる家族)	3
4	若者(16～30歳、30歳以上)	2
5	高齢者(50歳以上)	1
6	特定のニーズを持つ者	4
7	全ての人	9
	サービス・プログラム総数	27

やスペイン語を母語とする人のための通訳兼情報サービス、ロシア、東ヨーロッパ、スペイン語の女性を対象とした自助グループ、メンタルプロブレムを抱える者を対象としたザ・ネストのプログラムがある。また、この中に確定申告サービスを含めているが、これは高齢者および低所得者が対象となっていたためである。こうしたサービス・プログラムは、対象者が年齢別に区切られているが、実際のところは対象区分に当てはまらずとも、極めて柔軟に受け入れがなされている。（その後の調査で、2013年度に雇用プログラム（30歳以上を対象）の助成が終わり、2015年8月現在も実施されていないことを付記しておく。）

表2 サービス・プログラムの一覧

	対象者	S/P*	サービス・プログラム名
1	全ての人	S	コミュニティ 掲示板サービス
2		S	フリー・インターネット
3		S	フリー・プリンティング
4		S	法律相談
5		S	コーヒーサービス
6		S	ドナズアティック リサイクルストア
7		P	英会話クラブ
8		P	絵画クラス
9		P	スペシャルイベント
10	0～5歳の 子どもと養育者	P	クリエイティブ プレイタイム
11	0～6歳の 子どもと養育者	P	ファミリープレイス
12	5～10歳の 青少年	P	アウトオブスクールケア
13	5～11歳の 青少年	P	サマーデイキャンプ
14	8～11歳の 青少年	P	ホームワーククラブ
15	9～12歳の 青少年	P	プレティーンガールズ
16	9～15歳の 青少年	P	プレティーン ユースグループプログラム
17	15～30歳まで	P	ユースサーチ (若年者雇用プログラム)
18	30歳以上	P	雇用プログラム
19	シニア	P	シニアプログラム ①ランチサービス、②太極拳、③PCトレーニング、④外出プログラム、⑤シニアイベント

20	高齢者・低所得者	S	確定申告サービス
21	ロシア・スペイン語を母語とする者	S	通訳兼情報照会サービス
22	シングルマザー	P	シングルママズサポートグループ
23	12～36ヶ月の子を養育する親	P	マザーグースプログラム
24	0～5歳までの子を養育する親	P	ノーバディズパーフェクトプログラム
25	ロシア・東ヨーロッパの女性	P	ロシア女性の自助グループ
26	スペイン語を母語とする女性	P	スペイン語を母語とする女性の自助グループ
27	メンタルプロブレムを持つ者	P	ザ・ネスト

4 研究方法

(1) 研究方法

研究方法は、参与観察および聞き取り調査である。ネイバーフッドハウスは、先述した通り、多様なサービス・プログラムを展開しており、様々なニーズを持つ人、多世代が集っている施設である。また、施設に来る人々は、全ての人がある一定の言語(英語)を読み書きできるわけではないという現状もあり、アンケート調査による量的調査が不向きな場所であるといえる。

フィールドワークの方法に関しては、主に佐藤(2002a、2002b、2006)、R.エマーソン(1998)の文献から学び、まとめ方については、P.ウイリス(1996)、ノーマン.S(1997)、W.F.ホワイ(2000)、U.フリック(2002)を参考にした。

(2) 調査概要について

調査日時および調査協力者数は以下の通りである。調査協力者の一覧については、紙面の関係上、最後尾に添付をした。

調査日時：2010年3月1日(月)～3月15日(月)、
2010年8月13日(金)～9月11日(土)

調査協力者：23名

調査協力者の全体像について簡単に述べておく。調査協力者の性別は、女性が87%を占める。年齢構成では、10代が8.7%、20～30代が42.5%、40～50代が17.3%、60代以上が30.4%である。出生地は、カナダ出身者が30.4%、カナダ出身以外の者が69.6%である。家族構成は、単独世帯が47.8%、夫婦世帯(子あり)が17.4%、夫婦世帯(子なし)が13%、同居世帯が

13%、不明が8.7%である。在住地は、ウエストエンド地区が82.6%を占めている。就業等の状況では、就業していない者が87%である。本施設利用のきっかけは、通りがかりが21.7%、友人紹介が21.7%、Webサイトのボランティア募集を見てが13%、サービス・プログラム利用目的が13%、看板を見てが8.7%、その他が13%、不明が8.7%となっている。サービス・プログラムの利用の有無では、利用有は78.3%、利用無は21.7%である。ボランティア経験の有無は、経験有が65.2%、経験無が34.8%となっている。聞き取り調査の内容は、①年齢、②家族構成、③就業状況、④施設利用のきっかけ、⑤利用している／したサービス・プログラムについて、⑥ボランティア経験の有無の6項目である。

5 結果と考察

(1) サービス・プログラム提供におけるスタッフ・ボランティアスタッフの配置について

利用者とボランティアスタッフの役割転換を述べる前に、本施設内においては、どのようなサービス・プログラムの提供にボランティアスタッフが携わっているのかを知る必要がある。ここでは、サービス・プログラム提供におけるスタッフ・ボランティアスタッフの配置について述べる。

GNHにて提供されているサービス・プログラムの27種類のうち、ボランティアスタッフが配置されているものは、59.2% (16種類)である。このうち、特定の経験および専門性を要するボランティアは、英会話クラブと絵画クラス、法律相談サービス、確定申告サービスの4種類であり、25%を占める。特に経験を要しないボランティアは、リサイクルストアとコーヒーサービスであるが、どちらも金銭を扱う業務であるにも関わらず、スタッフの配置がなされていない。通常、金銭のやり取りには管理を伴うため、スタッフを配置すると思われるが、そうした業務にボランティアやインターンシップ生を配置していることは、GNHの特徴の一つであるといえる。これは、リサイクルストアやコーヒーサービスにおけるボランティア活動は、利用者の年齢層も幅広く、ボランティア活動を通してさまざまな人と出会える可能性をもたらすからであると考えられる^{vii}。

次に、スタッフのみが配置されているサービス・プログラムは、全体の22.2% (6種類)であり、ユースサーチや雇用プログラム、ロシア女性のサポートグルー

プ、コミュニティ掲示板サービス、フリー・インターネット、フリー・プリンティングである。これらのプログラムには、ボランティアスタッフを配置することは可能であるが、そうしていない。ユースサーチや雇用プログラムは、例えばパンフレットの折り込みや簡単な書類の整理、また訓練をすれば雇用の求人照会などもボランティアスタッフができるようになるが、それはサービス提供そのものに目的があり、ネイバーフッドハウスの人々の交流としての性格を帯びないためである。また、ロシア女性のサポートグループやノーバディズ・パーフェクトプログラムでは、同じような体験をした者同士の親密な関係性を重要視していることから、公にボランティアスタッフの募集は行っていない。サービス提供自体を目的としたサービスやプログラム、特定のグループへのサービスやプログラムには、人々の交流が目的とされないため、ボランティアスタッフを配置していないのであろう。そして、外部の者が講師としてサービス・プログラムを提供しているものは、全体の18.5%（5種類）であり、シングルママズサポートグループ、マザーグースプログラム、ノーバディズ・パーフェクトプログラム、スペイン語を母語とする女性のサポートグループ、ザ・ネストである。YMCAやISS（語学学校）、VCHA（Vanc. Coastal Health Auth（健康福祉サービス局））の職員や専門性を持つファシリテーターがサービス・プログラムを提供している。

ボランティアスタッフとスタッフおよび外部講師が配置されているものは全体の40.7%（11種類）を占めている。子どもと関わるサービス・プログラム（たとえば、クリエイティブプレイタイム等）では、スタッフが2人に対してボランティアは3～4人の配置、サマーデイキャンプ^{viii}では、1名のスタッフに6～8名、スペシャルイベントでは1名のスタッフに4～5名となっており、スタッフ人員の倍以上のボランティアが求められている。そのことから、サービスやプログラム提供を行う上でボランティアが担う役割は大きいといえる。

表3 サービス・プログラムにおけるスタッフおよびボランティアスタッフの配置の状況

	サービス・プログラム	スタッフ	ボランティアスタッフ
1	クリエイティブプレイタイム	2名	3～4名
2	ファミリープレイス	2名	3～4名
3	アウトオブスクールケア	2名	3～4名

4	サマーデイキャンプ	1名	6～8名
5	ホームワーククラブ	1名	3～4名
6	プレティーン ガールズ	1名	3～4名
7	プレティーンユース グループプログラム	1名	3～4名
8	ユースサーチ	6名	無
9	雇用プログラム	6名	無
10	シニアプログラム	1名	①ランチ提供4～5名、②太極拳1名、③PCトレーニング1名、④外出プログラム2～3名、⑤シニアイベント2～3名
11	シングルママズ サポートグループ	無：YWCA 職員1名	無
12	マザーグース プログラム	無：ファシリ テーター1名	無
13	ノーバディズ・パー フェクトプログラム	無：クリエイ ティブプレイ タイムのスタッフ 1名	無
14	ロシア女性の サポートグループ	1名	無
15	スペイン語を母語と する女性のサポート グループ	無：ISS 教員1名	無
16	ザ・ネスト	無：VCHA 職員4名	1～2名
17	英会話クラブ	無	ESL 指導 経験者1名
18	絵画クラス	無	絵画教室指 導経験者1 名
19	スペシャルイベント	1名	4～5名
20	法律相談サービス	無	ブリティッ シュコロン ビア大学法 学部生
21	確定申告サービス	無	カナダ歳入 庁で訓練を 受けた者2 名
22	通訳兼情報照会 サービス	2名	登録ボラン ティアス タッフ
23	コミュニティ掲示板 サービス	1名 (受付係)	無
24	フリー・インター ネット	1名 (受付係)	無
25	フリー・ プリンティング	1名 (受付係)	無
26	リサイクルストア	無	3～4名
27	コーヒーサービス	無：インターン シップ生1名	1～2名

(2) サービス・プログラム提供の時間帯から見る

利用者がボランティアスタッフとなる動き

GNH では、利用者がサービス・プログラムを利用するだけでなく、ボランティアスタッフとなってサービス・プログラムに参画する動きがある。参与観察の中で、サービス・プログラム提供の時間帯が、利用者がボランティアスタッフとなるために大きな役割を果たしているのではないかと考えられたため検討した。

サービス・プログラムが提供されている時間帯を表4に示す。そこにボランティアの配置をグレーで示した。まず、サービス・プログラムの配置と時間帯の特徴を見てみよう。サービス・プログラムの実施数は曜日によって異なり、サービス提供は月～土曜日まで開所時間に合わせて実施しているが、プログラムの実施は曜日ごとに違いがみられる。月曜日は18種類、火曜日は16種類、水曜日は18種類、木曜日は15種類、金曜日は17種類、土曜日は15種類、日曜日は1種類であり、グレーで示した箇所を見ると、月・水曜日には、より多くのボランティアが必要とされていることがわかる。クリエイティブプレイタイムは月・水・金曜日の9～12時まで開催され、シニアプログラムは火・木曜日の12～13時に実施されている。これは、提供場所(どちらも多目的室を使用)が同じであること、また両方のプログラムがボランティアを必要としており、特にランチ提供サービスには、調理する者やランチを提供する者、机などを用意する者とボランティアを多く配置することができるため、開催曜日をずらすことで、人員の整理もしていると思われる。また、アウトオブスクールケアとホームワーククラブをみると、月・水曜日の15～16時は時間帯が重なっている。アウトオブスクールケアは5～10歳、ホームワーククラブは8～11歳を対象としており、ホームワーククラブの学習支援者として来たボランティアスタッフがアウトオブスクールのボランティアスタッフも兼任するという姿がみられた。

E氏(30代・女性)は、水曜日の13～15時に実施されている雇用プログラムのワークショップを利用している。彼女は、スタッフからクリエイティブプレイタイムの手伝いを探していると聞き、雇用プログラムが始まる前の時間を利用して、ボランティアをしていた。また、ブラジルからカナダに移民をするためにやってきたT氏(20代・女性)とU氏(20代・男性)は、シニアプログラムでボランティアをしており、永住権取得後、雇用プログラムを利用するつもりである。雇用プログラムの個別相談は月～金曜日の9時～12時

に実施されるため、シニアプログラムのボランティアも継続するつもりだと述べていた。

上記のケースは一例であり、組み合わせによっては多様なケースが想定される。たとえば、土曜日にリサイクルストアでボランティアをしながら子どもを13時から始まるプレティーンガールズプログラム(9～12歳の女の子のレクリエーションプログラム)を利用することができ、木曜日に9～12時にコーヒーサービスにてボランティアをしてから、12～13時のランチ提供サービスを利用することも可能である。利用者がボランティアとして業務に携わる場合やボランティアが利用者になる場合、その様子からうかがえることは、1日のうちにボランティアをする機会が豊富に存在していることがあげられる。けれども、そのサービス・プログラムにおける時間帯の配置が、意図的に交流を生み出す仕組みとしてGNHに存在しているかどうか疑問があったので、受付のスタッフに尋ねると、「特に意識はしていない。自然とそうなった」とのことであった。これは、スタッフが利用者とボランティアスタッフの様子を察したり、彼らの話を聞く中で検討された結果の積み重ねであると思われる。施設側の都合ともいえるサービス・プログラム提供の時間帯設定を優先するのではなく、利用をする当事者の思いを反映し続けてきた結果の産物であると考えられる。

(3) 利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性

利用者でありつつボランティアスタッフでもあるという役割転換を考えるためには、利用者・ボランティアスタッフの中に、その立場を変えた、あるいは二つの立場を持つようになった事例を検討する必要があるだろう。まず、サービス・プログラムの利用の有無とボランティア経験の有無を以下の表5にまとめた。ここでは、表5の「b. サービス・プログラムの利用有、ボランティア経験有」が検討の対象となり、その数は11名である。なお、この11名のうち、10名はカナダ出身以外の者であった。(C氏(10代・女性・ロシア)、E氏(30代・女性・中国)、F氏(50代・女性・ロシア)、I氏(40代・女性・ロシア)、J氏(50代・女性・チェコ)、R氏(70代・女性・スコットランド)、S氏(20代・女性・中国)、T氏(20代・女性・ブラジル)、U氏(20代・男性・ブラジル)、W氏(80代・男性・アメリカ)) また、紙面の関係上から、E氏、W氏、O氏、T氏、U氏の事例を取り上げ、検討する。

表 4 サービスとプログラムの実施時間およびボランティアスタッフの配置

[illegible]

●および★印は、プログラムやサービスが行われている時間である。★は、サポートグループ内の話し合いによって決められている。

表5 サービス・プログラムの利用の有無と施設内におけるボランティア経験の有無

サービス・プログラムの利用有無／ボランティア経験の有無	人数	割合	カナダ出身	カナダ出身以外
a. サービス・プログラムのみを利用	6名	26%	4名	2名
b. サービス・プログラムの利用有ボランティア経験有	11名	47.80%	1名	10名
c. サービス・プログラムの利用無ボランティア経験有	5名	21.70%	2名	3名
d. サービス・プログラムを利用無ボランティア経験無	1名	4.30%	0名	1名

表6 対象者の年齢構成と性別

	女性	男性
10代	1名	0名
20～30代	4名	1名
40～50代	3名	0名
60代以上	1名	1名

①利用者からボランティアスタッフへ

ここでは、E氏(30代・女性)とW氏(80代・男性)の事例を取り上げて、利用者からボランティアスタッフとなった動機、過程について検討を行う。

ケース1：E氏(30代・女性)

E氏は、2000年にカナダの永住権を取得し、単身で香港からバンクーバー市ウエストエンド地区に来了。バンクーバー市に到着した頃は、カナダは好景気に恵まれていたため特に苦勞せずとも旅行代理店の事務仕事を得られたという。その後、失業したため、インターネットにて求人検索をしていた際、GNHのユースサーチプログラム(15歳から30歳までの若年者用の雇用プログラム)を見つけ、2003年にGNHへ初めて訪れた。ユースサーチプログラムでは、レジユメの書き方や面接の受け方、求人紹介、職探しに関するワークショップの利用の他にも、GNHのリサイクルストアで販売されているスーツやカバン、靴など仕事に必要なものの、さらに、日用雑貨に至るまで全て無料でもらえたという。その後、仕事を得たが、2009年の時に会社が倒産したため失業し、現在では雇用プログラムを受講している。求人の掲示板を見るためにGNHに通う中で、スタッフからクリエイティブプレイタイム(0.5歳児の預かり保育)にて子ども達の見守りをする人手が足りないということを聞き、雇用プログラムが始ま

るまでの間に手伝うことにしたという。ボランティアを引き受けたという彼女に、「香港でもボランティアをした経験があるの?」と尋ねると、「ない」と否定をしていた。「ボランティア(volunteer)というより、スタッフから言われて手助け(help)をしている。時間があつたからしているだけで、仕事をしていたらボランティアはできないと思う」という。

ケース2：W氏(80代・男性)

W氏は、2005年にバンクーバー市の隣に位置するバーナビー市からウエストエンド地区に引っ越しをしてきた。散歩途中に、GNHのランチ提供サービスの看板を見て利用をしたことがきっかけとなり、それ以来、毎週火・木曜日は必ず来るようになったという。その他にもリサイクルストアも利用し、日用雑貨などはそこから購入している。彼は2008年に、GNHのコーヒーサービスでよく出会う友人と教会で偶然出会い、その友人から「実は、ネストプログラムでボランティアをしている」という話を聞いて、どんなことをしているのか興味本位で参加をしはじめたという。ネストプログラムは、BC Mental Health & Addiction Services (BCMHAS)のスタッフが精神疾患(麻薬やアルコール依存症含む)を抱えた人々のために茶話会を開いているプログラムであり、内容はスタッフやボランティアがコーヒーやサンドイッチ、マフィンなどの軽食を用意して会話やゲームを楽しむというものである。W氏は、このプログラムに「半分は興味を持って」参加をしたという。半分という意味は、5年間もGNHに通っている常連であるのに、「GNHにて、そのような取り組みがなされているなんて全く知らなかった」という驚きと、「ゲームは大好きだから、自分でもできるし、私は人を楽しませる天才だからね」である。彼は、第二次世界大戦前にマジシャンとしてアメリカや日本(銀座)に興行旅行をし、その後テレビの普及とともにマジックを辞めた経験を持つ。筆者には、「もうマジックをしない」と言っていた彼だが、ネストプログラムでは簡単なマジックを披露していた。彼がはじめてネストプログラムに参加をした時、コミュニケーションが取れる者はスタッフと話やゲームをして楽しんでいるようだが、そうでない者はコーヒーやマフィンを口にして帰っていく姿を見て、「せっかく来ているのだから、何かしてやろう」と思ったという。現在では、毎週火・木曜日はシニアプログラムのランチ提供サービスを利用し、金・土・日曜日の夕方からボランティアスタッフとしてネストプログラムに参加をし

ている^{ix}。

E氏とW氏の事例から言えることは、彼らはパンフレットや看板などを見て「このボランティアをした」と選択をしたのではなく、ましてや強い動機をもっていたわけでもない。E氏は、2003年からGNHの雇用プログラムを利用し始め、ボランティアスタッフとして活動を行うようになったのは2009年からのことであった。きっかけは「スタッフから声をかけられた」であるが、E氏が「ボランティア (volunteer) というより、スタッフから言われて手助け (help) をしている。時間があつたからしているだけで、仕事をしていたらボランティアはできないと思う」と述べているように、彼女にとっては、GNHにおける活動は、手助けという認識である。「香港ではボランティアをしたことがない」とはっきりと答えた彼女であったが、彼女は「ボランティア」という響きが、何か特別なことをするように感じている。GNHにプログラムの利用をするために通っている彼女にとってみれば、GNHにいることは日常生活の一部であるため、手助けという感覚を得ることができたのではないかと考えられる。また、彼女は、たまたまスタッフから手伝ってほしいと言われたから手助けをしているのではなく、「(2) サービス・プログラム提供の時間帯から浮かび上がる利用者がボランティアスタッフとなる動き」でも述べたように、ボランティア活動をするために自分のスケジュールの調整をする必要がなく、自然な形でボランティアができる仕組みがGNHに存在しているからであるとも思われる。また、スタッフも誰にでも同じように声をかけているのではない。スタッフは、大学にてソーシャルワークや心理学を専攻し、アウトリーチ活動によって鍛えられた確かな目を持っており、E氏を選んで声をかけたのだと推測される。

W氏は、シニアプログラムのランチ提供サービスを受けるためにGNHを訪れていた。彼は、ユーモアが好きで、大変魅力の溢れたおじいちゃんである。彼は、友人がネストプログラムでボランティアをしているという話を聞いて、「興味本位で参加した」という動機には、「常連であるにも関わらず知らなかった」、「友人は知っていたのに自分は知らなかった」という思いがある。そうした興味本位で始めたボランティアであったが、「私は人を楽しませる天才だからね」という言葉通り、ネストプログラムの利用者に簡単なマジックを披露して楽しませ、彼自身も会話やボードゲームを楽しんでいる。また、彼は、大変よく人を知

ろうとする。彼とは筆者が語学学校に通学中に知り合った(2007年)のだが、彼から「陣地取りゲームをしよう」と誘われ、2階のソファがあるところでボードゲームをしたことがきっかけとなり、大変仲が良くなった。語学学校の帰りにGNHに立ち寄ると、必ず彼はいた。筆者は、彼はゲームが好きなのだと思って、私が相手をしている気分になることもあったのだが、ゲームをする時はいつも”Learn fast!”と言い、何度も関わりを持っているうちに、彼は、筆者の語学力を向上させたのだということがよく伝わった。それは、一緒に行っていたボードゲームは、陣地取りゲームの他にも、Lの字がLから始まるたとえばLetterなどの言葉を並べ、語尾のrで始まる単語を自分の持ち駒から考えて並べるという遊びだったからである。筆者にはハンディとして辞書をもたせ、時間制限もなく、彼は筆者に付き合ってくれていたのだ。こうした関わりの中で、彼の波乱万丈な人生について聞き、私の話もよく聞いてくれた。彼が、ネストプログラムの利用者に対し、「せっかく来ているのだから何かしてやろう」という思いの裏には、利用者の人生を聞き、何かしたいという気持ちになったのではないかと考えらえる。

彼らの利用者からボランティアスタッフとなる過程において、GNHにおけるボランティアは、手助けや興味本位を起点とし、その活動は彼らの日常生活の一部に組み込まれていっている。そして、生活の一部であるからこそ、何か特別なことをしているという感覚がないのであると思われる。

②ボランティアスタッフから利用者へ

ここでは、O氏(30代・女性)、T氏(20代・女性)とU氏(20代・男性)の事例を取り上げて、ボランティアスタッフから利用者となった(これからなる)者の検討を行う。

ケース3：O氏(30代・女性)

O氏は、カナダ出身であり、ウエストエンド地区からはバスで50分ほどかかるキツラノ地区に住んでいる。彼女は、大学において栄養学コースを専攻している。GNHを知ったきっかけは、大学のボランティアの掲示(ファミリープレイスにおける調理師募集)を見て、興味をもったからである。彼女には2歳の娘がおり、ボランティアを始めた時には、「調理中に娘に手を取られてはいけない」と思い、自身の母親に預けていたという。母親は、土・日曜日以外はパートタイ

ムで働いていることもあったので、娘を預けることが可能であったが、「正直なところ、預けるのは悪いと思っていた」という。その後、スタッフやボランティアスタッフ、利用者と関わる中で、2歳の娘のことを話すと「一緒に来たら娘さんの面倒は私(利用者)が見ますよ」と言われたことがきっかけとなり、ボランティアをしてから3ヶ月目に試しに連れていくことに決めた。当初は、2歳の娘の人見知りを心配していたが、スタッフと利用者大切にされている姿を見て安心したと同時に、娘がスタッフとともに踊るダンスは楽しいようで、ボランティアをしない土曜日にも、利用者としてファミリープレイスに訪れるようになった。

ケース4：T氏(20代・女性)とU氏(20代・男性)

T氏とU氏は恋人同士であり、半年前にブラジルからバンクーバーに来了。ブラジルにいた頃は、T氏は広告代理店に勤務し、U氏は大学にて情報工学を学んでいた。U氏は、大学卒業後、専門性を活かした就職をしたかったのだが、ブラジルには職がなく、そのため彼らはより良い未来を求めてカナダへの移民を決意した。彼らはESLに通っており、他国から来た留学生の友人は大勢いるが、バンクーバーに住むにあたって、カナダ人の知り合いが一人もいない状態であった。そのため、カナダ人の知り合いがほしいという動機からGNHのスペシャルイベント(WestEnd Cultural Event)に参加し、そこでスタッフからボランティアの誘いを受けてシニアプログラムでのランチ提供サービスに参加をするようになった。ボランティアとして参加する中で、利用者の一人から雇用プログラムのことを教えてもらい、永住権取得後は、GNHの雇用プログラムを利用したいという。U氏は、英語での日常会話は差し支えなくでき、読み書きもできるのだが、カナダでビジネスができるほどの実力ではないという。また、ブラジルの大学を卒業しているが、カナダにおいて就職をする場合、英語とフランス語の試験を受験をして合格しなければ、彼の大学卒という学歴はそのまま通用しない。彼は、バンクーバーに来てから新聞の求人広告を見て仕事がないことに気付き、「時給10ドルの皿洗いであれば、夏の間はウエストエンド地区のどこのレストランでも募集をしているが、それも一時的な仕事だ」と述べ、早く仕事をみつけて生活を安定させたいという思いが強く感じられた。

O氏がボランティアをするファミリープレイスと

は、親子合わせて20名程度を受け入れており、保育の資格を持つファシリテーターが絵本の読み聞かせやリトミックなどを1時間程度行い、その後、ボランティアスタッフが調理をした料理を食べながら親同士、子ども同士が交流をするというものである。O氏は、このボランティアをするために、自宅からバスを利用して50分ほどかけてGNHまで来ている。夫はフルタイムで働いているため、育児・家事は彼女がすべてを担っている。彼女は、育児後、すぐに働きたいという思いが強くあり、大学に通う傍ら、ボランティアとして社会との接点を保っておきたいという動機がある。彼女にとってのGNHにおけるボランティアには明確な目的があったため、ボランティアをした当初は、「調理中に娘に手を取られてはいけない」と思い、パートで働くO氏の母親に遠慮をしながらも娘を預けて活動をしていた。しかし、GNHでのボランティアを通して、利用者やスタッフとの人間関係が構築されていき、利用者から「一緒に来たら娘さんの面倒は私が見ますよ」をきっかけとして、娘と共にGNHを訪れるようになった。利用者側は、彼女が調理中にキッチンをのぞきに来て声をかけたり、率先して手伝いをする者までいる。また、調理後は彼女も利用者に交じって料理を食べ、利用者にレシピを教えたりしている。こうした様子を見てみると、利用者側は、調理をしている彼女のことを役割を担った人(調理師やサービス提供者、ボランティアスタッフという役割)と見做しておらず、こうした利用者側の態度から、彼女自身の「ボランティアスタッフとして」という意識が次第に変容していったのではないかと考えられる。

T氏とU氏がボランティアをするシニアプログラムのランチ提供サービスは、ランチは一種類しかないのだが、ボランティアをする際に、スタッフから、利用者からの注文を受ける、コーヒーか紅茶かを尋ねる、ミルクか砂糖はいるか尋ねる、食器を下げてよいのか聞く、という一連の流れを教えてもらう。この流れに従ってサービスを提供するのだが、英語が不得意な者でも、繰り返していくうちに言葉を覚え、利用者との会話もできるようになってくる。バンクーバーに来了移民者が最初に得られる仕事内容は、飲食業(皿洗い)、清掃業、家事手伝い、ケアワークである。ここでのランチ提供サービスは、これらの仕事をするための要素が含まれているといえる。ランチ提供サービスの時間帯は、12～14時まででの2時間であるが、ボランティアは12～13時を受け持つ。その後、13～14時まででは利用者と混じって共に食事をし、そこで

利用者との交流が図れるようになっている。T氏とU氏は、希望を持ってカナダへ移民してきたが、現実の厳しさも次第に見えてきたということが感じられた。当初、U氏は彼女であるT氏の付き添いという形でGNHのボランティア活動をしていたが、利用者との関わりが生まれる中で、U氏自身もボランティアを楽しめるようになったという。彼らは、同世代の友人は今もできていないが、シニアプログラムで出会った高齢者の知り合いは数多くできたとのことであった。ブラジルから来た彼らにとってGNHは、ボランティアを通して、人々と出会い、日常会話のスキルアップもでき、雇用のサポートを受けられ、不測の事態(病気、失業、出産など)が起こったときにも頼ることができるセーフティネットの役割を果たしている。今後、特にU氏からは生活を安定させたいという思いが強く見られたことから、雇用プログラムを受講する可能性は高く、利用者としてもGNHに組み込まれていくと思われる。また、雇用プログラムを利用するようになった場合、ボランティアを辞めるかどうかS氏に尋ねると、「まだわからないが、ボランティアは続けたい」とのことであった¹⁰。

6 おわりに

GNHにおけるサービス・プログラムの内容、サービスやプログラムにおけるボランティアスタッフの配置、実施の時間帯を踏まえて、利用者からボランティアスタッフへ、ボランティアスタッフから利用者へとなる様子を、事例を通して検討した。利用者からボランティアスタッフとして活動を行う過程には、彼らにとって、明確な活動動機があったわけではなく、そこでの活動が日常生活の一部として行われていることであり、「手助け」として捉えられていた。そして、ボランティアスタッフから利用者になる過程には、自己のニーズ充足だけでなく、利用者とのかかわりを通して、ボランティアスタッフとしての役割意識から解放される様子がある。また、通常、ボランティアをする場合はボランティア登録を行ったり、ボランティア日誌への書き込みをするのだが、ケース1,2にて取り上げたE氏とW氏はしていない。コミュニティディベロッパーのアナ・マリア・ブスタマンテ氏に、「ボランティアの登録およびログへの書き込みをしていない人もいるが、しなくてもいいのか」と尋ねると、「もちろん書いてほしいけれど、ボランティア登録もログへの書き込みも、書きたい人だけが書けばいい」とい

い、「GNHで公表しているボランティアの時間は、ログに書き込みをした総合計を書いている。実際の時間はもっと多くなるだろうけど、人の行動を管理できないし、する必要もない」という。対外的な面からみれば、政府や企業からの補助金をもらう上で、多くのボランティアがされた時間をパンフレットやホームページに掲載したいだろう。けれども、全員に登録やログへの書き込みの管理をしたならば、小さな手助けであっても、「これは、ボランティアかどうか」という境界線に人々を立たせてしまうことにもつながりかねない。ネイバーフッドハウスには、こうした紙面上の数字としては出てこない「手助け」が数多く存在し、また、それが期待されているのであり、活動を支える大きな柱となっているといえるだろう。

引用・参考文献

- Cavers, V. with Carr, P. and Sandercock, L. (2007) .
“*How Strangers Become Neighbours : Construction
Citizenship Through Neighbourhood Community
Development*” , Metropolis British Columbia Working
Paper Series No.07-11
- 鯨岡峻(2007)『エピソード記述入門』東京大学出版会
- Putnam,R.D. (2000) “*Bowling alone: The collapse and
revival of American Community.*” New York:Simon&Schus-
ter. (柴内康文訳(2006)『孤独なボウリング：米国コ
ミュニティの崩壊と再生』柏書房)
- Paul Willis (1981) “*Learning to labour : how working
class kids get working class jobs*” Columbia University
Press New York (ボール・ウィリス著、熊沢誠、山
田潤訳(1996)『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房)
- R・エマーソン、R・フレッツL・ショウ著、佐藤郁也、
好井裕明、山田富秋訳(1998)『方法としてのフィール
ドノート』新曜社
- Sandercock, L.(2003). “*Cosmopolis II : Mongrel Cities in
the 21st Century.*”, Great Britain:MPG Books Ltd.
- 佐藤郁哉著(2002a)『フィールドワークの技法』新曜社
- (2002b)『組織と経営について知るための実践
フィールドワーク入門』有斐閣
- (2006)『フィールドワークー書をもって街へでよ
う』新曜社
- S.R.Lauer, M.C.Yan (2010) “*Voluntary Association
Involvement and Immigrant Network Diversity*”,
Journal Compilation,IOM (International Organization
Migration) ,Vol.51,Issue3,pp133-150

- U. フリック 著、小田博志他訳(2002)『質的研究入門
＜人間の科学＞のための方法論』春秋社
- William Foote Whyte, (1993) “*Street Corner Society*
4th Edition” The University of Chicago Press
(W.F. ホワイト 著、奥田道大・有里典三訳(2000)『ス
トリート・コーナースサエティ』有斐閣)
- Yan, M.C. (2004).” *Bridging the Fragmented Community:
Revitalizing Settlement Houses in the Global Era*”,
Journal of Community Practice, 12(1/2) p.51-69
- Yan, M.C. and Lauer, S. (2006).” *Bridging newcomers
in the neighbourhood scale: a study on settlement
/ integration roles and functions of Neighbourhood
Houses in Vancouver.*”, Final Report School of Social
Work and Family Studies. UBC
- (2008) “*Social Capital and Ethno-Cultural Diverse
Immigrants: A Canadian Study on Settlement House
and Social Integration*” Journal of Ethnic & Cultural
Diversity in Social Work, Vol.17, Issue3, pp.229-250

資料 1 調査協力者の属性

性別

性別	人数	割合
女性	20 名	87%
男性	3 名	13%

年代構成

年代	人数	割合
10 代	2 名	8.7%
20 代	4 名	17.4%
30 代	6 名	26.1%
40 代	1 名	4.3%
50 代	3 名	13%
60 代	1 名	4.3%
70 代	4 名	17.4%
80 代	2 名	8.7%

出身地

出身地		人数	割合
カナダ出身	バンクーバー	5 名	30.4%
	バンクーバー以外	2 名	
カナダ出身 以外	ロシア	4 名	69.6%
	中国	2 名	
	日本	2 名	
	ブラジル	2 名	
	アメリカ	1 名	
	イラン	1 名	
	エチオピア	1 名	
	スコットランド	1 名	
	チェコ	1 名	
	エチオピア	1 名	

家族構成

世帯	人数	割合
単独世帯	11 名	47.8%
夫婦世帯(子あり)	4 名	17.4%
夫婦世帯(子なし)	3 名	13%
同居世帯	3 名	13%
不明	2 名	8.7%

在住地

在住地	人数	割合
ウエストエンド地区	19 名	82.6%
イーストバンクーバー地区	1 名	4.3%
サウスバンクーバー地区	1 名	4.3%
キツラノ地区	1 名	4.3%
バンクーバーアイランド	1 名	4.3%

就業等の状況

就業等の状況		人数	割合
就業している		1 名	4.3%
就業していない	年金生活	7 名	87%
	ESLの学生	6 名	
	主婦	3 名	
	大学生	1 名	
	小学生	1 名	
	失業中	1 名	
その他		1 名	
不明		2 名	8.7%

施設利用のきっかけ

施設利用のきっかけ		人数	割合
通りがかり		5 名	21.7%
友人紹介		5 名	21.7%
Web サイトの募集を見て		3 名	13%
サービス・プログラム利用		3 名	13%
看板を見て		2 名	8.7%
その他	幼い頃、母に連れられて	1 名	4.3%
	コミュニティセンターで知って	1 名	4.3%
	大学の掲示板を見て	1 名	4.3%
不明		2 名	8.7%

サービス・プログラムの利用の有無

利用の有無		人数	割合
利用している / 利用したことがある		18 名	78.3%
利用していない		5 名	21.7%

ボランティア経験の有無

ボランティア経験の有無		人数	割合
有		15 名	65.2%
無		8 名	34.8%

(資料2 調査協力者の一覧)

	呼び名	性別	年代	original	家族構成	在住地	就業等の状況	施設利用のきっかけ	利用している / したサービス / プログラム	ボランティア経験の有無	聞き取り調査日
1	A	女	70	ロシア	単独	West End	無職(年金)	友人紹介	無	リサイクルストア(毎週金・木)	2010/3/12
2	B	女	30	イラン	夫婦	West End	学生(ESL)	友人紹介	無	リサイクルストア(たまに)	2010/3/12
3	C	女	10	ロシア	単独	West End	学生(ESL)	友人紹介	リサイクルストア	リサイクルストア(不定期)	2010/8/14
4	D	女	80	フィリピン	単独	West End	無職(年金)	通りがかり	無	無(不用品の寄付)	2010/8/14
5	E	女	30	中国	単独	West End	無職(失業中)	プログラムの利用	雇用プログラム	チャイルドケアプログラム リサイクルストア(不定期)	2010/8/19
6	F	女	50	ロシア	単独	West End	不明	友人紹介	セツルメントプログラム	リサイクルストア ※ボランティアコーディネーター	2010/8/19
7	G	女	20	日本	単独	West End	学生(ESL)	友人紹介	リサイクルストア	無	2010/8/20
8	H	女	30	カナダ	夫婦	Vancouver Island	就業中	幼い頃、母親と来た	リサイクルストア(月1)	無	2010/8/20
9	I	女	40	ロシア	単独	East	学生(ESL)	看板を見て	セツルメントプログラム	リサイクルストア(毎週)	2010/8/20
10	J	女	50	チェコ	不明	West End	不明	不明	リサイクルストア	リサイクルストア(毎週)	2010/8/20
11	K	男	60	カナダ	不明	West End	無職(年金)	プログラムの利用	チャイルドケアプログラム アウトオブスクール リサイクルストア	無	2010/8/20
12	L	女	70	カナダ Prince Edward	単独	West End	無職(年金)	不明	リサイクルストア	無	2010/8/20
13	M	女	70	カナダ	単独	West End	無職(年金)	通りがかり	無	リサイクルストア(毎週)	2010/3/14 2010/8/20
14	N	女	30	カナダ	夫婦、子1人	West End	無職(主婦)	看板を見て	マザーグースプログラム	無	2010/8/21
15	O	女	30	カナダ	夫婦、子1人	Kitsilano	大学生	大学の掲示板を見て	ファミリープレイス(不定期)	ファミリープレイス(月2回)	2010/8/21
16	P	女	30	日本	夫婦子1人	West End	無職(主婦)	コミュニティセンターで知って	ファミリープレイス	無	2010/8/21
17	Q	女	10	カナダ	夫婦子1人	West End	小学生	小学校から	アウトオブスクール	無	2010/8/23
18	R	女	70	スコットランド	単独	West End	無職(年金)	通りがかり	確定申告	リサイクルストア(毎週月・火)	2010/8/23
19	S	女	20	中国	2人(叔父)	South	無職(9月から大学生)	Webのボランティア募集を見て	リサイクルストア(1回のみ)	シニアプログラム(隔週火・木)	2010/8/24
20	T	女	20	ブラジル	2人(恋人)	West End	学生(ESL)	Webのボランティア募集を見て	スペシャルイベント	シニアプログラム スペシャルイベント	2010/8/24
21	U	男	20	ブラジル	2人(恋人)	West End	学生(ESL)	Webのボランティア募集を見て	スペシャルイベント	シニアプログラム スペシャルイベント	2010/8/24
22	V	女	50	エチオピア	夫婦	West End	無職(主婦)	通りがかり	無	シニアプログラム(毎週火)	2010/8/24
23	W	男	80	アメリカ	単独	West End	無職(年金)	通りがかり	シニアプログラム コーヒーサービス リサイクルストア	ザ・ネスト	2010/3/14 2010/8/24

【注】

ⁱ 14 の ネイバーフッドハウス は、Association of Neighbourhood Houses of British Columbia（バンクーバー市ネイバーフッドハウス協会）に所属もしくは連携している施設である。なお、それぞれの施設は、各自に運営予算があり、自立した活動を行っている。
① Alexandra Neighbourhood House, ② Ceder Cottage Neighbourhood House, ③ Collingwood Neighbourhood House, ④ Downtown Eastside Neighbourhood House, ⑤ Frog Hollow Neighbourhood House, ⑥ Gordon Neighbourhood House, ⑦ Kitsilano Neighbourhood House, ⑧ Kiwassa Neighbourhood House, ⑨ Little Mountain Neighbourhood House, ⑩ North Shore Neighbourhood House, ⑪ Sasamat Neighbourhood House(キャンプ施設), ⑫ Surrey-Oak Avenue Neighbourhood House, ⑬ South Burnaby Neighbourhood House, ⑭ South Vancouver Neighbourhood House

ⁱⁱ 彼は、2004 年からブリティッシュコロンビア大学の School of Social Work に所属し、研究活動を行っている。彼の主な研究は、settlement and integration of immigrants and refugees, critical cross-cultural and antiracist practice, place-based community development and policy, globalization and social development, and North-South social work knowledge transfer である。

ⁱⁱⁱ Yan 教授のバンクーバー市における実践は、www.nhvproject.ca. に詳しく記載されている。

^{iv} ネイバーフッドハウスの特徴をまとめたものについては、ネイバーフッドプロジェクトのホームページ www.nhvproject.ca. がわかりやすい。ネイバーフッドハウスの特徴を列挙しておく、プレイス・ベースドアプローチ、マルチサービス（サービス提供の統合）、コミュニティ主体の活動、社会参加とカナダへの移民者の統合を推進、地域コミュニティにおける社会資本の創出、社会サービスと教育を受ける機会を増加させる、地域住民間に肯定的な相互作用を促進させる、地域のニーズへの配慮（サービス展開は、地域住民の必要性が最重視される）、メンバーシップサービスアプローチ（積極的な参加者としてのサービス利用者の立場、また当事者意識の促進への取り組み）、コミュニティの構築（共同体意識と集団効力感の促進）、自助とエンパワメントおよび相互の助け合いの関係、アドボカシー、社会変革、戦略的・包括的に多様な社会変革

の課題における異なるグループを引き合わせる、多様性の尊重、多世代間交流の強化、多様性への配慮と尊重である。

^v ウェストエンド地区に関する情報は、バンクーバー市の <http://vancouver.ca/files/cov/profile-west-end-2012.pdf> が詳しい。

^{vi} たとえば、ダウンタウンのグランビル駅から 10 分ほどスカイトレインで東に行くと、ジョイス駅がある。そこから徒歩 3 分の場所にあるコリングウッドコミュニティセンターの門は、先住民族のトーテムポールの装飾がされている。その壁にダイバシティステートメントが掲げられているが、内容は先住民族の権利回復の過程が強調されたものになっている。バンクーバー市内に位置する YMCA もダイバシティステートメントを掲げているが、「われわれは、ダイバシティに基づいた組織であり、チャリティや地域を巻き込んだ活動をしている」と書かれており、ダイバシティ自体を具体的に表現したものではなかった。

^{vii} たとえば、B 氏(30 代・女性)は、イランからカナダに移民をして 1 年になるが、移民当初は語学力も不十分であったため、友人ができずにいた。語学学校の友人を通して GNH の存在を知り、GNH が提供している英会話クラブを利用する傍ら、リサイクルストアでのボランティアもはじめた彼女は、リサイクルストアに来る利用者との会話を通して日常会話も上達し、ここで、毎週月・水に出会う人と友人にもなれたという。

^{viii} サマーデイキャンププログラムのボランティアは、主に夏休み中の大学生(ブリティッシュコロンビア大学、サイモンフレイザー大学)からの応募がある。

^{ix} 2014 年 8 月に GNH を訪れた際、2013 年に亡くなったことをスタッフから聞いた。筆者は彼が住むグループホームにも招かれるなど、彼とのかかわりは深かった。心から冥福を祈る。

^x 「おわりに」にて、書ききれなかったのが、ここに記すが、セトルメント運動を源流としたネイバーフッドハウスの取り組みは、現代においては、もはや移民者を主対象とした支援組織ではない。もちろん、新しく移民者をした者、短期・長期の留学生などの利用は多い。しかし、長期的に見た場合、カナダに移民をし

た者は、3世、4世が出現してきており、そうした者も本施設の利用者となってきた。彼らは、自分のルーツである言語を話せても読み書きができなかったり、伝統行事や文化などは知らない者も多い。本施設の調査を通して、カナダ出身と回答した者のうち、ボランティアスタッフとして活動している者は7名中1名であった。その理由は、ボランティアを「考えたこともない」、「する時間がない」というもの、けれども、最も筆者が注目をした出来事は、「スタッフが声をかけていない」という点であった。スタッフの観点から、ボランティアとして巻き込む人(Involvement)というものを考えているのだろうか。そうしたことを含め、今後も調査を行いたい。また、筆者は、ネイバーフッドハウスのような施設を日本においても展開したいと考えてきたが、日本は専門分化した施設展開であること、利用者の中に「我々のコミュニティを創る」という意識、参画するという行為の意味合いが、カナダとは随分違うこと、そういった面で、日本におけるネイバーフッドハウスの展開については、困難さを感じる。